

明治前期の漢学塾と門人

—新潟県西蒲原郡長善館を事例として—

教育学コース 池田雅則

Relationship between a Private School of Chinese Classics and its Followers in the First Half of Meiji Era
—A Case Study of *Chou-zen-kan* in Rural of Niigata Prefecture

Masanori IKEDA

Chou-zen-kan (private school of Chinese classics) in rural of the first half of Meiji era was organized by the rich, celebrities and intellectuals (doctors, men of religion, and so on) in local, and existed in closely relation with various societies of them. Then *Chou-zen-kan* and its followers were connected by various aspects (blood, education, politics, culture, religion and so on) which were grown in long term. But we can emphasize some cases of voluntarily admission which weren't bound by local communities also existed.

目次

はじめに

1. 前提

- A. 塾について
- B. 分析方法について

2. 門人の特質

- A. 空間的広がり
- B. 階層的広がり
- C. 年齢と教育程度
- D. 周辺との比較

3. 塾と門人の関係

4. 有力者による塾運営への関わり

おわりに

はじめに

明治前期において初等段階の教育を修めた青少年が学ぶ場は、政府の制度に則る内容を持つ中学校から、雑多な教育内容を持つ学問塾まで多種多様な場が叢生していた。そしてこの時期にとりわけ多く存在していたのが漢籍を主な教育内容とする漢学塾である。明治17年の『文部省年報』によれば、和漢学を主とする各種学校749校に32,405人の生徒という当時の中学校(133校, 15,100人)などを大きく上回る人数が在籍している。本稿では、その門人と塾の関わりを具体的に検討

し、当時の漢学塾が教育の場としてどのように社会の中に位置していたのかについて、新潟県の農村部に存在した長善館学塾の事例から明らかにしたい。

明治期の漢学塾を対象とする先行研究では、まず教育内容、課程や運営法などの塾内部の諸事項を重視して塾の性格を論じる研究や、個々に異なる性格をもつ塾について、同時に多数を分析対象にしながら総括的なイメージの提示を試みる研究が先行している¹⁾。また評価としては、自由民権運動につながる塾の事例を高く評価してきた²⁾。

しかしながら、当時の塾は近世の塾と同様に個々の塾がそれぞれに周辺の社会状況との強い関係の中で存在していたと考えられる³⁾。ゆえに、当時の塾の位置づけを試みる上では、個別の塾の研究や塾外部の社会との関係を重視した研究も強い必要性がある。また本稿が対象とする長善館は、運動への関わりは消極的であったが、本稿の目的は門人と漢学塾との関係のあり方を問題とすることで、当時の社会における教育の構造の一端を解明することにある。ゆえに、研究対象は運動史が必ずしも高く評価しない対象であったとしても、当時の社会における教育の構造全体を解明する上で、本研究には少なからぬ意義がある。

さらに本稿は、歴史的に存在した多種多様の社会的結合、すなわち血縁や地縁などに還元しきれない個人的な意思を含んだ結合に着目する近年の研究動向にもつながる⁴⁾。この動向では塾も社会的決結合の一種

に捉えられている。本稿は、当時の教育の構造の一端を明らかにするだけでなく、社会的結合のあり方を教育に基づいた結合から問う研究としても意義がある。

本稿が着目する門人は教育内容の受け手として、塾を構成する不可欠な存在であり、加えて本来塾外の存在である。ゆえに門人の検討により、塾という教育の場(結合)の社会における位置づけ、ひいては当時の農村社会における教育の構造を問うことにつながる。

本稿では、前半部では長善館門人の特質を周囲の塾や中学校と比較しながら検討する。後半部では門人と塾にまつわる具体的な関係を検討する。そして、教育の場(結合)として明治期漢学塾がどのように社会に位置していたのかを明らかにしたい。

1. 前提

A. 塾について

長善館は、長岡藩領の粟生津村(現燕市、2006年3月まで西蒲原郡吉田町)に1833(天保4)年に開塾し1912(明治45)年まで存続した男子のみの塾である⁵⁾。越後平野西部に位置する村は、『皇国地誌』によると1875(明治8)年現在、約94町7反の田と約24町2反の畑を有する稲作中心の村であった⁶⁾。初代館主の鈴木文台(通称陳蔵、1796~1870)は、粟生津村医師の二男として生まれ、大田錦城門下の者に詩書を学び、江戸へ出て亀田鵬斎の講義を聞くが失望、その後独学した。帰郷後は場所を定めず子弟の育英にあたり38歳で開塾した。文台は維新後明治政府の三条民政局より学校創造庶務心得に任命され、郷学の教師を兼務した。二代目館主の惕軒(通称健蔵、1836~1896)は、三島郡片貝村(現小千谷市)医師三男として生まれ、長善館入門後才能を見込まれ婿として鈴木家に入った。惕軒は学期には近隣の小学校の教則制定に関わり、1876(明治9)年から3年間学区取締に任命され多忙な日々を送った。また幕末には尊皇派の草莽隊へも部分的に参加している。惕軒次男(長男早世)の柿園(通称鹿之介、1861~1887)は、長善館を経て17歳の1877(明治10)年上京し、攻玉社を経て同人社を卒業後帰郷し、英学と数学を加える塾則改正をしたが、1887(明治20)年に若くして死去した。一時帰省した1882(明治15)年には郡立西蒲原中学校の漢学教師を勤めている。三代目館主で惕軒三男の彦嶽(通称時之介、1868~1919)は東京専門学校卒業後、惕軒死後開塾まで塾を維持した。

本稿は、惕軒が学区取締を解任され塾務に専念可能になった1879(明治12)年6月から、柿園が帰省し塾則

を改正する1885(明治18)年7月までの約6年間入門者を分析対象とする。この時期は、開塾以来1885(明治18)年まで52年間の入門者数677人のうち141人(21%)という入門者の集中が起こり、在籍門人数も82年69人、83年72人、84年66人と推移し明治期では最も塾に門人が在籍した時期であった⁷⁾。この明治10年代半ばの長善館の隆盛は『文部省年報』等に示される漢学塾隆盛と一致するものであり、この時期の長善館門人を対象とすることは適切な選択といえよう。

当時の塾の教育内容は、同時期の漢学塾同様に学派にとらわれない幅広い内容をもっており⁸⁾、“漢学ニシテ古学派ナリ、文詩ヲ兼教フ”塾であるとしながらも、“素読ハ合刻四書論孟詩書易礼記文選皆ナ山子点ヲ用フ。史ハ十八史略 蒙求 世説 春秋左氏伝 国語 十七史 通鑑 大日本史 外史ノ類。経ハ十三経注疏ヲ根拠トシ歴代諸賢ノ説ヲ取りテ折衷シ義理ノ至当ヲ求ム…子ハ荀晏管賈韓非老莊”とし、老莊をも含む幅広い漢籍、『日本外史』などの国史、詩文の学習の3つを塾の柱としていた。一時期隔日に1時間のみ算術があったが、1881(明治14)年には漢学専門に戻っている⁹⁾。

さて、2代目館主惕軒はこの時期において自分の教育観を著作の形としてまとめなかったが、断片的な発言が残されている。まず彼は、“漢之所長文徳”と述べ、“文徳”すなわち学問により人を教化・心服させる品格が身につく点を漢学教育の意義に挙げていた¹⁰⁾。この品格のない近年の青年は、“世務ノ処シ難キヲ知ラスシテ政治ヲ高談スル者アリ。異日ノ蹉跌ヲ顧ミスシテ酒色ニ沈溺スル者アリ。権利ヲ主張シテ義務ヲ忘れ衛生ヲ細論シテ奢侈ニ流ル。”¹¹⁾と批判の対象となる。ここからは民権運動や開化への慎重な態度がみられ、そのためか、幕末は尊皇運動に参加した惕軒が民権運動に積極的に参加した記録はない。

B. 分析方法について

本稿では長善館門人に関する史料を基礎に分析を試みるが、塾には横帳・刊行本の2種類の『長善館門人姓名簿』、および『イロハ別生徒姓名簿』という計3種類の門人帳が現存している。このうち『イロハ別生徒姓名簿』記載の大半の門人は、塾が英学数学を取り入れた1885(明治18)年9月以降の門人である。また2種類の『長善館門人姓名簿』のうち刊行本は、横帳を基本に再編集され1885年8月に刊行されたもので、記載された門人はほぼ重複している。以上重複を除くと、対象時期の入門者は141人となる。なお、長善館の日記

の記述を見ると門人帳記載者以外の者の入門記録が4人確認できるが、少数であり明らかになる情報も少ないので今回は分析対象から除外したい。

横帳の『長善館門人姓名簿』には、門人氏名に加え、出身地、入門年月、入門年齢、父兄氏名、出身寺院名が、刊行本の『長善館門人姓名簿』および『イロハ別生徒姓名簿』には姓名と出身地が記載されている。このうち出身地に関しては全員が判明するが、その他に関しては門人により不明の場合がある。ただし長善館の日記や郷土史研究などにより判明する場合もあり、判明した者に関しては情報を付け加えた上でデータベース化した。

長善館の先行研究には門人の分析を試みたものもある¹²⁾。だがその分析は、使用史料が長善館の門人帳のみであるため、門人の空間的広がりが判明するものの、階層的広がりは伝記中の著名な門人が断片的に紹介されるだけで総括的な分析が不十分である。また、空間的把握も論文執筆現在の行政区分に基づくため、現在も変転する行政区分は、明治前期の地域社会とは一致しない。本稿では、門人の社会的・経済的地位を総括的に分析可能とする史料を門人帳にリンクさせた分析や、当時の地理的条件を加味して分析を試みたい。

そして、長善館の分析結果を同時代に存在した同程度の水準をもつ近隣の教育の場と比較することで、長善館の地域における位置づけを試みる。今回は、長善館から南に20キロ離れた小都市長岡の漢学塾誠意塾(1881年に元長善館門人の高橋竹之介が開業)の門人帳¹³⁾と、北に12キロ離れた郡役所所在地の巻町に1882年に郡内全町村の連合で設立され、郡内各町村からの支出で運営された、郡立西蒲原中学校の生徒名簿¹⁴⁾とを比較対象とする。

2. 門人の特質

A. 空間的広がり

塾の門人の空間的広がりについて、行政区分に拠るバイアスを避けるため塾と門人出身地との距離を指標として分析をしたい。表1からは、塾から半径8キロという近隣の地域出身の門人が過半数を占める一方、20キロ以上遠から入門する者も少なくなかったことがわかる。つまり、近世において全国から遊歴する門人たちを集めた有力塾や、明治中期までの大都市に出現した高等教育予備校のような全国的な門人・生徒の空間的広がりはないものの、手習塾や小学校のように大半の門人・生徒が近隣集落であるわけではない。長善館

は空間的広がりとしては両者の中間に位置していた。

こうした一定程度の空間的広がりを生み出す条件としては、近世以来の塾の伝統、幅広い教育内容、尊皇運動に参加した師匠の名声などの質的条件と、寄宿舎とい

う設備面の条件が考えられる。ここでは設備面に注目しておく。明治10年代の越後平野では鉄道は未開通で、村内を流れる川(西川)に汽船が運航されるのが1884(明治17)年であり、交通状況は近世末期と変化していなかった¹⁵⁾。それゆえ全門人が通学生であるならば、その通学可能距離は限られることになる。

日記記録には、門人が通学か寄宿かが判る箇所がいくつかある。それらをまとめると、塾のある粟生津から8キロ圏内の出身者61人の場合、寄宿21人・通学40人で、3分の2が通学生であった。しかし、8キロ圏外の出身者51人の場合、寄宿45人・通学6人で8割以上が寄宿生であった。8キロ圏外の門人にとっては、塾への通学は困難であったことがうかがえる。長善館は遠距離からの門人も多数いたが、塾の教育内容がいかに魅力あるとも遠方からの門人が半数近くを占める状況は生まれがたかったといえよう。

B. 階層的広がり

ここでは門人の階層について、その経済的、文化的、社会的地位を考察したい。まず経済的地位については、農村部の富裕層の大半を占めていた地主を中心にみる。塾が存在した蒲原平野は国内で最も地主制が発達した地域とされる。西蒲原郡は、その中でも後進地とされるが、明治10年代後半以降明治30年ごろにかけて急激な地主制が進展した¹⁶⁾。こうした背景をもつ新潟県では多数の地主名鑑が作成された。本稿ではやや時期的なずれがあるが最も多数の地主名が判明する地主名鑑で、当時の衆議院選挙権保有者と一致する地価600円(地租15円)以上の地価所有者の氏名が判明する1893(明治26)年の『正確新潟県地価持名鑑』および1898(明治31)年の『新潟県衆議院議員選挙人地価持芳名録』という2種の地主名鑑を使用した。1893年当時の地価600円は西蒲原郡の地価を基準にして考えると田1.86町に当たる。地価600円以上の土地を有する者は、郡

表1 門人出身地と塾の距離

km	人数	割合
～4	54	38.3%
4～8	23	16.3%
8キロ未満	75	54.6%
8～12	19	13.5%
12～16	11	7.8%
16～20	9	6.4%
20～	23	16.3%
県外	2	1.4%
8キロ以上	64	45.4%
総計	141	100.0%

内人口の1.7%、総戸数比11.3%¹⁷⁾あり、上位1割の富裕層と位置づけられよう。

つづいて文化的地位については、地域の知識人層出身の門人をみる。農村部における代表的な知識人としては医師と僧侶といった宗教者が挙げられる。本稿では医師を1889年に内務省が発行した全国の医師名鑑である『日本医籍』から調査する。また、寺院については長善館の『長善館門人姓名簿』の記載に拠り調査する。

ただし地主名簿に記載されるのは戸主なので、門人帳記載のその兄弟や子は戸主との続柄が明らかにならない限り、地主層出身とは確定できない。『日本医籍』では住所不明な者が多数所載され、門人帳でも記載の不備で全ての寺院出身者が判明する訳ではない。それゆえ、調査で明らかになるのは上記階層に属する者の「最小値」である。

さて、史料を検討し、上記3階層にカテゴライズされる者およびその割合を示したのが表2である。すると、地主層34.8%、医師8.5%、寺院11.3%となり、以上3階層のいずれかに属する者で過半数となる。そして、よりデータの照合がされやすい親族が判明する門人に限れば、その値は60%近くに上昇する。また、上記に加え同集落で同姓の者が上記3階層に属する、つまり一族である可能性がある者も含めると、親族判明者ベースで85%超という高率となる。すなわち、塾門人の中で上記3階層に属する者は、60%~80%ほどという高率であったと推測できる。なお、塾を経営する鈴木家自体も地主層に属していた。鈴木家は1893年現在で2058円の地価(西蒲原郡田換算にして6町4反)を所有していた。鈴木家は漢学教育に専念することで、多くの門人の属性から断絶した性格を持っていた訳ではなく、基礎的な部分では門人たちと共通の土台をもつ

表2 長善館門人の階層構造(地主・僧侶・医師)

階層	全体		親族判明者	
	人数	割合	人数	割合
地主	47	33.3%	44	39.6%
医者	8	5.7%	8	7.2%
僧侶	11	7.8%	7	6.3%
地主・医者	1	0.7%	1	0.9%
地主・僧侶	1	0.7%	1	0.9%
医者・地主同姓	3	2.1%	3	2.7%
僧侶・地主同姓	4	2.8%	1	0.9%
地主同姓・医者同姓	2	1.4%	2	1.8%
地主同姓	36	25.5%	28	25.2%
僧侶同姓	3	2.1%	1	0.9%
地主または僧侶または医師	75	53.2%	65	58.6%
3階層と同姓同集落を含む	116	82.3%	96	86.5%
いずれにも当てはまらない	25	17.7%	15	13.5%
全体	141	100.0%	111	100.0%

ていたことが確認できる。

ところで上記階層に含まれる者には、旧幕時代の割元・庄屋・町年寄、大区小区制下での戸長・用掛などの村落統治に当たる者が少なからず存在していた(表3)。ただし東大田村の金子と小関村の廣川は、上記3階層のいずれにも当てはまらない。彼は明治10年代以降に没落した家か経済的基盤なく政治的力量を有した者であろう。仮に後者であるとするならば、塾への入門にはその社会的地位も影響するといえよう。

表3 村落統治に当たる門人の家の一例

門人名	備考	地価額 (1893)
宮路玄三郎	宮路家は長岡藩中野村庄屋	地主同姓
笹川元治	父宇三郎、溝村用掛	6633
和田悌四郎	養父次郎、長岡藩粟生津組割元、粟生津・上河原村用掛	4923
坂田俊次郎	父廉平、第3大区小3区戸長	4082
竹山祐彦	一族祐ト、横田村用掛	4200
金子貞二郎	父太三郎、東大田村用掛	-
富所俊次郎	父兵一郎、長岡藩大田村庄屋、西大田村用掛	6902
田中冬治	祖父耕作、燕町年寄	2863
富取松市	父武七、地藏堂村用掛	649
南須原伝次郎	父斎、第3大区小1区戸長	1301
廣川長松	父長六、小関村用掛	-
片桐清麿	父重雄、長岡藩高木村庄屋、高木村用掛	771
星野和平	長岡藩高木村組頭	6226

『新潟県管内村名石高人員表』1876、『吉田町史通史編』2004

そしてこれら村落統治の任に当たる者たちは、それぞれ個別に存在してきた訳ではなく相互に関係しあって存在していた。近世長岡藩支配下の村では、出先機関である代官所移転に関して村落を越えて粟生津組総代庄屋、同組割元格、吉田組総代庄屋、同組割元格、佐渡山組総代庄屋、同組割元格で請願している¹⁸⁾。そして粟生津村総代庄屋は和田家であり、割元格は後述する隣村下粟生津村長谷川家であり、吉田組総代庄屋は西大田村庄屋富所家の本家であり、いずれも長善館入門者を輩出する家であった。また範囲を粟生津村に限っても、次節で詳述するように長善館に門人を入門させた家の者が政治的に共同歩調を取っていた。少なくない長善館門人層は、その政治的地位も共有していたと考えられよう。

ところで、農村上層を構成するのは上記3階層に限られない。まず医師・寺院以外に農村部の知識人として存在していたのが神官である。長善館のある粟生津村から北西8キロには著名な弥彦神社があり、1885年にはその第45世高橋光義の子である甚蔵が入門してい

る。また同時期に旧吉田町域で唯一神主が常在する吉田神社神主吉田家の息子も入門していたことが確認される。他に近隣の在郷町の地蔵堂米商家の子弟富取家の者も入門していた。しかし士族の門人は非常に少なかった。もとより西蒲原郡の士族人口はわずか0.36%に過ぎないが¹⁹⁾、塾に入門したことが確認された士族は新潟県一等属である岡山県士族の息子(井上幡男)だけで、この時期郡内の士族の入門は確認されない。

C. 年齢と教育程度

分析時期の入門者141人のうち年齢が判明する者35人の入門年齢を取り上げると、7歳1人、11歳3人、12歳4人、13歳3人、14歳6人、15歳5人、16歳7人、17歳2人、19歳20歳26歳27歳が各1人となり、その平均は15.1才で10歳未満の者や20歳以上の者も含まれるが35人のうち30人が11歳から17歳という年齢に含まれる。当時の学校制度に照らせば、小学校高等科や中学校に当る年齢の少年が入門していたといえる。そして1885(明治18)年に入門した佐藤良三郎は、入門以前に小学校中等科中退の学歴を持っていた²⁰⁾。入門者は基礎的なリテラシーを既に身につけていたと考えられる。

D. 周辺との比較

長善館の門人の性格は、他の教育の場との比較でどのように位置づけられるのだろうか。

長岡の漢学塾誠意塾の1887年から1892年の門人205人を分析すると、その空間的広がりには塾から8キロ圏内の入門者は18.5%(38人)に過ぎず、8キロ以遠の入門者が81.5%(167人)を占め、39.5%(81人)が20キロ以遠からの入門者であった。ただし新潟県外出身者は2名に過ぎず、その広がりには限界があるといえる。また門人の階層を分析すると、父兄名が判明する者173人のうち地主層に属する者が56.7%、医師に属する者が0.6%、寺院出身者が8.1%となる。

西蒲原中学校入学生徒72人を分析すると、その空間的広がりには8キロ圏内の生徒が74.0%を占め、長善館と比較して非常に高い値を示している。また西蒲原郡以外の出身者は僅か2.8%(2人)に過ぎない。なお長善館では他郡出身者が33.3%(47人)を占めていた。また門人の階層を分析すると、父兄名が判明する者95.9%(70人)のうち地主層に属する者が29.2%、医師1.4%(寺院出身者は不明)であった。

以上の結果を長善館と比較すると、門人の空間的広がりには、誠意塾は長善館より大きく、西蒲原中学校は小さい。誠意塾は地理的に交通の要衝である長岡に位

置し、集落が分散して存在する山村地域をすぐに控えていた。また、誠意塾は基本的に寄宿生のみを受け入れる塾で、塾からの距離の近さが入門者の性格に大きく反映されない。誠意塾主が長善館出身であり、素読・輪講・講義・詩文添削・算術という漢籍・詩文・算術という内容が²¹⁾、長善館とさして変わりはないことを考えれば、地理的・経営上の差異が通学圏の差異につながる要素であったといえよう。西蒲原中学校はその設立経緯と運営からして、郡内町村とのつながりが非常に強かった。このことが地域性の強さに表れたのではない。

また門人の階層を比較すると、地主層は、誠意塾が長善館より大きく、西蒲原中学校は小さい。医師は長善館が突出している。寺院に関しては、長善館と誠意塾の間に差異はみられない。誠意塾寄宿生の月費用負担(月30日として算出)は、月謝20銭、食料費2円70銭、塾費6銭の計3円ほどであった²²⁾。対して長善館は、月謝は50銭であったが寄宿料を含めば4円ほどになるという²³⁾。寄宿生の負担は長善館の方が重い、通学生を受け入れる長善館の場合は小さい負担でも入門可能であった。ゆえに階層の幅は長善館の方が広がるであろう。こうした差異が誠意塾と長善館の地主層の差異に示されたと考えられる。また、西蒲原中学校は授業料を徴収していなかったようだ²⁴⁾。さらに貧しい学生には給費もしていた²⁵⁾。つまり西蒲原中学校への入学への経済面でのハードルは2つの漢学塾に比較して非常に低くなる。それゆえ地主層の割合が比較的良かったのではないだろうか。

医師の家出身の者が長善館に多かったのは、長善館鈴木家がそもそも医師の家に端を発しており、さらに2代目館主暢軒も医師の家出身であったことが影響していよう。このような経歴を持つ長善館は医師との親和性が高かったのであろう。

さて、西蒲原中学校には長善館にはない階層的特質がみられる。士族層の存在である。長善館には士族の入門者は1人であったが、西蒲原中学校には9人(12.3%)の士族生徒がいた。このうち8人は巻町もしくは峰岡村の出身であった。巻町の近隣にある峰岡村は、長岡藩支藩の三根山藩が所在した地である。彼らは旧三根山藩士子弟と考えてよいだろう。上述のとおり西蒲原郡人口中、士族は僅か0.36%に過ぎなかったが、中学校生徒における士族の割合は非常に高い。近代的な教育内容を備えた中学校と士族の親和性の高さは先行研究でも指摘されているが²⁶⁾、そのような関係が西蒲原中学校においてもみられたといえよう。また、

学費負担の小ささも資産のない士族には魅力が高かったのではなかろうか。誠意塾については士族の割合は不明だが、塾が所在した旧藩所在地の長岡町出身の門人が僅か3.9%であることを鑑みれば、長善館同様に高くはなかったと推測される。

また西蒲原中学校は1882年に開校し1885年初めに閉鎖されるが、その在籍生徒数の年毎の変遷は、82年50人、83年40人、84年34人と推移し徐々に衰退し、長善館の在籍門人数を上回らなかった。中学校はその教育内容の充実が繁栄につながらなかったようだ²⁷⁾。

以上細かい比較をするとそれぞれに差異がみられたが、誠意塾における地主・医師・寺院の3階層が占める割合は長善館と同じ6割程度であり、一定の空間的広がりをもつ富裕層と知識人が主に門人を構成していたことから共通性の方が強いといえる。長善館の構造は当時の漢学塾としては突出していたわけではないと考えられる。

また長善館と西蒲原中学校は地域性や階層構成に異なる性格を有していた。この差異は、設立経緯や運営方法、教育内容と階層の親和性などの違いが影響している。そして当時漢学単科である長善館が安定した門人を集めていたのに対する中学校の衰退傾向からは、制度に則った教育が士族層を除いて地域に十分浸透していなかったことがうかがえ、伝統的な知識がなお必要性を保っていた地域の状況が示されよう。

3. 塾と門人の関係

以上、長善館の門人の傾向を明らかにしてきたが、上記傾向に合致することが直接に長善館という特定の漢学塾への入門につながる訳ではない。傾向への合致は入門の重要な契機の1つに過ぎない。入門はその他の複合的な契機も重なった結果と捉えるべきであろう。以下では、塾と門人とをつなぐ契機を入門事例より具体的にみていくことから検討したい。

冒頭に述べた社会的結合の広がりや構成に着目した研究では、塾は教育もしくは学習を志向する個人的意思が働く結合の一類型として捉えられている²⁸⁾。当時の塾の繁栄の基礎には塾の幅広い教育内容や師匠の教育理念への共感があったことは想像に難くない。しかし、対象が大都市の頂点的知識人が営み遍歴する学習者が入門する全国的な学問塾ならともかく、長善館のような塾については、その特質を考える上で「血縁」や「地縁」といった従来の共同体を構成する原理もまた欠かせないだろう。本稿では、従来からの縁故関係もま

た析出しながら塾の構造を検討することとしたい²⁹⁾。

長善館の日記からは、入門希望者は1人で塾へ来訪する訳ではなく多くの場合は付添人を連れていることが確認される³⁰⁾。つまり塾と入門者の関係を考える上では、塾と門人との二者だけではなく、付添人も含めた三者を考慮する必要がある。そして塾と入門者および付添人との関係を類型化すれば、まず「A：入門前の直接的関係が確認できる」「B：入門前の直接的関係が確認できない」という2つの場合が想定される。Bに関しては、史料からは関係が確認できなかった場合と、塾の教育を強く求めていた場合が想定できる。Aについては、「①入門者自身と関係がある」「②付添人と関係がある」という2つの場合が想定される。そして①に関しては、「i：類縁関係」「ii：再入門」「iii：iおよびii以外の社交関係」の3つの場合、②に関しては、「i：類縁関係」「ii：門人」「iii：iおよびii以外の交際関係」の3つの場合を設定しておく。

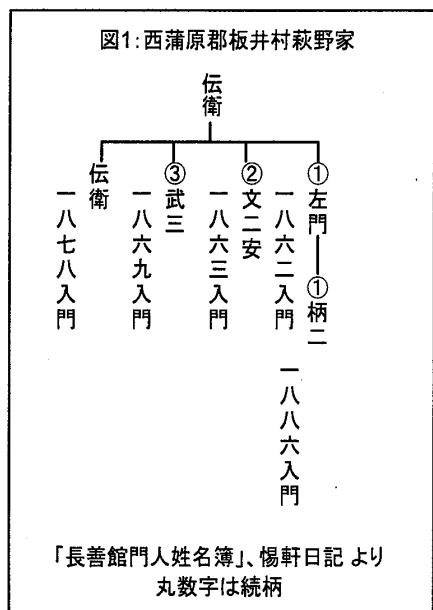
・A-①の場合

「ii：再入門」の場合は、1人だけ存在する。また「iii：iおよびii以外」の場合は、入門者の年齢傾向から推察できるように、塾と入門者の直接的関係が確認できる場合は、入門者の父兄が介在する交際の場面であった。ゆえにiiiの場合は「A-②」にて述べたい。さて「i：類縁関係」の事例を取り上げると、小川欽四郎、木村次郎、鈴木勘治、鈴木三四郎の4例が確認される。前者2名は2代目館主惕軒の類縁で、後者2名は粟生津村鈴木家の一族出身である。惕軒は鈴木家に婿入りするが、そもそも彼は粟生津村から南方40キロメートルも離れた三島郡片貝村(現小千谷市)の医師小川家出身であった。すなわち欽四郎は地元にいる甥である。また木村次郎も彼の甥であるが、彼の父であり惕軒の兄である確は養子入りし抄紙部職員として東京府王子に在住していた。このように遠方に関わらず、あえて惕軒の長善館に留学させたのは縁戚関係あってこそであろう。

・A-②の場合

「ii：門人」の事例、すなわち長善館の門人もしくは門人の父兄が、新しい入門者を連れてきた事例は17例確認できる。この内付添人と入門希望者との関係が類縁である場合が12例で多数を占め、それ以外の関係にある場合が5例である。

すなわち範囲を1833(天保4)年の開業時より1888(明治21)年までの55年間に広げると、入門者数689人中の4分の1に当たる67組177人の間に類縁関係が判明する。たとえば西蒲原郡板井村(旧黒崎町、現新潟



市)の萩野家では図1に挙げたように25年以上にわたり5人の入門者を輩出している。また、西蒲原郡地藏堂村(旧分水町, 現燕市)の山田家の場合は、1883(明治16)年に旧門人である祖父が付添いとなり孫を入門させており、長善館と家との関係が3世代に渡る場合さえあった。つまり前者の入門形態の意味することは、すなわちある一族から複数名以上の入門者が出ている場合が多いということであり、長善館の教育の信頼度の高さや地域への定着を示す証左であるといえよう。

一方で後者の場合は長善館の門人またはその父兄が、知人の入門希望者の付添いをした場合である。1881年入門の大河津村(旧分水町, 現燕市)の田辺軍平は粟生津村内の旧門人近藤右伝治が付添い入門している(1881.3.8,308)³⁹⁾。1883(明治16)年入門の米納津村(旧吉田町, 現燕市)真宗本願寺派光福寺の北村義順は旧門人で松橋村(現燕市)の永井宗碩が付添い入門している(1883.7.5,314)。

つづいて「i: 血縁」は本稿の対象時期には事例が確認できない。しかしその直前の1879(明治12)年1月に事例があり、楊軒甥で片貝村の小川椿太郎(門人でもある)が近隣の来迎寺村(旧三島郡越路町, 現長岡市)の永井行蔵の入門付添いをしている(1879.1.15,306)。

「iii: i および ii 以外」は鈴木家周辺の日常的な交際関係が入門の前提にあったとみられる場合である。具体的にいくつかの場面を取り上げよう。

長善館鈴木家は、政治的な判断が必要な場面で地域の有力者たちと共同歩調をとっていた。たとえば1885年の凶作の際には、自らも地主層を構成していた鈴木家は村内の地主層と共同して施米を行った³²⁾。施米は、

鈴木家の他、和田家、小島家、内田家、鈴木本家(以上詳細は表4参照)などの長善館の門人層が含まれている。また1887(明治20)年の条約改正に際しては、回送されてきた条約締結反対の署名に粟生津村周辺の53名とともに署名をしている³⁹⁾。ここでも片桐家(清磨が85年入門)、星野家(保次が84年入門)、和田家など長善館の門人層を構成する地主層が多数含まれていた。

また長善館をはじめこの地域の富裕層・知識人の間では、18世紀前半以来、俳諧や漢詩などを介した文化的な交際が活発になされていた。18世紀の粟生津村では割元の和田家や鈴木家本家を中心に俳諧が流行していた。そして18世紀末になると和田家を始め粟生津村周辺の農村上層では漢詩文が流行し始める。この漢詩文の交際の定着を決定付けたのは西蒲原郡南部・三島郡北部を拠点にした僧良寛である。地域の文人たちは良寛と深い関係をもつことで文化的な交際を花開かせた。その中には長善館初代館主の文台もいた³⁴⁾。

対象時期には文台とともに良寛との交際の輪にあった、粟生津村和田家(悌四郎が80年入門)、牧ヶ花村解良家(林平が82年、正六が83年入門)、雀森村幸田家(虎三郎が81年入門)などの家からの入門者がみられる。こうした交際は明治10年代でも続き“午後四時招和田父子〔悌四郎が80年入門〕内田兄弟〔信平が79年入門〕小島父子〔太郎一が在籍中〕宗家父子〔宗久が85年入門〕、勘太郎〔息子の勘治が80年、三四郎が83年入門〕善八松下笹川父子〔元治が80年入門〕片桐重雄〔息子の清磨が82年入門〕、而宇三郎善二郎宗久善八不参、片桐宿、此夜各分韻題〔韻を各々分け合って漢詩を作る遊興〕数首”(1884.1.8,314)などの、地域の有力者が集まった詩会の記録も残されている。

そして、宗教を介した入門もあった。長善館の鈴木家は家に隣接する真言宗智山派長楽寺に墓地を構えている。日記には、“長楽寺来訪、乞国上寺僧某々〔丸山光英、舎人行圓〕入門”(1884.11.5,315)と記録されている。国上寺(旧分水町, 現燕市)は真言宗豊山派に属している寺で、宗派は異なるが長楽寺と同じ真言宗の寺である。上記の入門は真言宗寺院間のネットワークの延長でなされたといえよう。

ここまでは塾が存在する粟生津村を中心とした交際のネットワークを介した入門事例を取り上げてきた。しかし、交際のネットワークによる入門は粟生津村を中心としたものだけに限られなかった。それは楊軒の出身地である片貝村に関わる縁故関係が影響している入門事例である。表1にも挙げたように粟生津村から20キロ以遠の地からの入門者は23人(16.7%)を占めて

いた。そして、このうち7人が粟生津村から40キロも離れた片貝村から僅か4キロ以内という狭い地域を出身としていた。内1人は既述した惕軒の縁者であったが、他の6人には血縁関係は確認できない。たとえば、1882年入門の佐藤軍治郎の佐藤家は1893年に14908円の地価額の土地を所有し、加えて酒造業も営む素封家であった。惕軒の日記には彼が片貝に帰郷した際の佐藤家当主との交際の場面が記載されている。一例を挙げれば、“夕南堵道舎〔注 惕軒一族の家〕開別宴、浄照寺大塚益郎佐藤左平治同儀三安達伴吉同八洲山口寛治〔山賀与八郎不参〕堀謙治新野某釜屋某等集会皆醉歌歎舞鉉鼓和之、東西二兄至夜而来会、余与八洲及椿鹿席上分韻”（1880.8.24,308 下線引用者）という“醉歌歎舞鉉鼓”“分韻”といった文化的な交際である。こうした事例からは惕軒の生地に関わる縁故をも長善館への入門につながっていたことが推測される。

・ Bの場合

以上、塾もしくは鈴木家と従来からの関係が確認された入門の事例を取り上げた。しかし、従来からの交際関係からだけでは説明しきれない入門事例もある。長善館の教育自体に共感し入門したと考えられる事例である。たとえば“斎藤和平太年十六小池村斎藤五郎兵衛長男丸山顯吉五千石村丸山某男年十九来乞質問十八史略、二人皆西輕塾生也”（1880.7.21,308）という記述からは、当時塾の南方8キロにあった学問塾西輕塾の塾生2人が惕軒のもとに『十八史略』の質問に来たことがわかる。このうち斎藤和平太は翌日に“此日ヨリ日勤”（1880.7.21,308）と入門をした。斎藤の父義範は幕末の長善館門人であり、そうした縁故も長善館への入門につながった要因と考えられる。しかし、一度質問に来てから入門するという手順を見る限り、斎藤の入門事例には教育への魅力に基づく自発的な入門の契機があったといえよう。また、他の門人が残した作文には、

余ノ少キヤ游戲ヲ好ム、長ズルヤ又依然トシテ改メス、一日近隣ノ兒輩余ニ謂テ曰ク、汝已ニ十余歳ナリ、我問フ所ノ字ヲ解スルヤト、乃チ書シテ余ヲ促ス、不幸ニシテ余其字ヲ知ラズ、遂ニ余ヲ罵笑シテ去ル、是ニ於テ、余憤懣涙ヲ流シ、歎シテ曰ク、嗚呼余愚ニシテ游ヲ好ミ、道ヲ知ラザルヲ以テ、人余ヲ罵笑ス、辱是ヨリ大ナルハ莫シ、丈夫世ニ生レ、人ニ罵笑セラレテ黙止ス可ケンヤ、縦令長ズト雖モ、志ヲ立テズンハ有ル可カラズト、即チ龍ノ水ヲ巻キ、天ニ上ルノ氣ヲ生シ、遂ニ此ノ館ニ入門ス、³⁵⁾

と自分の無知を恥じたことを契機に入門を志した経緯が述べられている。このような事例も自発的な入門の契機と捉えられよう。

4. 有力者による塾運営への関わり

以上の考察より、長善館（鈴木家）が地域社会の中で長い時間をかけて培ってきた強い縁故関係がその基盤にあったことが明らかとなる。そしてさらに史料を見ていくと、塾と門人たちとの関係は単に塾に子弟を預けるといった程度ではなく、一部の門人の父兄は塾の運営にまで参加する場合もあった。

既述のように対象時期の長善館は入門者が集中した。1883年には在籍門人数が72人にまで膨れ上がっている³⁶⁾。この門人数の増加は、塾の設備のキャパシティーを超えるものとなったようで“旧館亦浅狭”³⁷⁾という状況を招いていた。この事態に対して、館主鈴木惕軒は“於是同盟相議、更造立新館”³⁸⁾、“与和田片桐諸君相議、謂解良長谷川、内田小嶋及宗家主人也”³⁹⁾と表4に挙げた門人の父兄と会合をもった。彼らは長善館の代表的な階層である地主や医師といった階層出身であるだけでなく、その多くは近世以来村行政の頂点にある庄屋戸長経験者であった。また、彼らの間では養子や嫁のやり取りを通じた強い関係が窺える。彼らは門人父兄の中でも有力者であり、かつ深い関係にあった者といえよう。

では惕軒は具体的に彼らとはどのような話し合いをしたのであろうか。塾新築に関する記述の初出は、1880年9月の“塾新築ノ心組ヲ以テ絵図ヲ画ス”（1880.9.22,308）という記述である。この月は12人の入門者が確認できる特に入門者が集中した時であり、急激な門人数増加が塾の新築を促したのであろう。その後惕軒は、材木屋や大工と相談することで塾の新築計画を徐々に進めている。そして、同年大晦日に“柄澤省三議塾造築之事”（1880.12.31,308）と、塾新築について旧門人である地域の有力者と話し合いをもった。そして翌年になると会合が頻繁に行われる。まず、2月下旬に“大議塾新築”（1881.2.23,308）という少なくない人数が集合し塾新築の話し合いが持たれた。そして翌月には“伴小島太久治来塾新築位地”（1881.2.28,308）と、新しい塾舎の位置についても周囲の有力者と相談した上、3月末に建築が始まった（1881.3.31,308）。

新塾の建築が始まると、“入費”つまり費用問題が持ち上がった。5月に“書新塾食堂及玄関等ノ図、呼竹蔵、議入費”（1881.5.11,308）と、惕軒が書いた設計

表4 長善館塾舎の新築に関わった者

家	住所	登場者	入門者輩出数	備考	所有地価額(1893)
解良家	牧ヶ花村	右一郎	9	牧ヶ花村大庄屋、右一郎は佐藤家出身、楊軒仲介で養子入	18540
和田家	粟生津村	次郎	3	長岡藩粟生津組8ヶ村割元、粟生津上河原用掛	4715
片桐家	高木村	重雄	3	高木村庄屋、貫一郎は小学校訓導	771
長谷川家	下粟生津村	勝次郎	4	下粟生津村庄屋、勝次郎は幸田家出身	2928
内田家	粟生津村	善次郎	2	町村制粟生津村村長、県会議員(1892、改進黨)	7646
小島家	粟生津村	太久次	2	太久次長男太郎一は県会議員、議長など歴任(98~1920、進歩党から国権派を経て立憲政友会)	5837
柄澤家	三島郡上桐村	八十太郎	4	鈴木宗家の妻が柄澤家出身	18530
金内家	笈ヶ島村	優二郎	1		6887
笹川家	溝村	宇三郎	3	溝村戸長、良造は楊軒娘竹子夫	6633
鈴木本家	粟生津	有本	3	医師	3574
高嶋家	山崎村	良宣	2	長岡藩山崎村18ヶ村割元、大区小区制第3大区小4区長(1876、弥彦郷21ヶ村)、県会議員(1879~1887、自由党派)	606

『長善館門人姓名簿』1885、前掲『吉田町史通史編』、新潟県議会史編さん委員会編『新潟県議会史』2001-2002、『粟生津村先哲伝』1929、『分水町史資料編4』2003、『新潟県管内村名石高人員表』1876、上野又吉『確正新潟県地価持名鑑』栄新堂、1893

図に基づいて、大工と費用の相談をもったことを手始めに、立て続けに数回の会合が持たれた。そのうち規模が大きかったのは21日と29日の会合であった。

まず21日の会合は長善館が幹事であった「菁莪会」という頼母子講の定期会合と同時に開催されている⁴⁰⁾。先の19日に“乞小島太久次議菁莪会料理、又議新塾入費云々”(1881.5.19,308)と、小島と会の料理と塾新築についての話し合いを持ち、“菁莪会、片桐和田長谷川解良喜三次樋口笹川高島誠一郎山崎三郎次山浦大二郎伊丹屋藤吉内田信平小島太久治出席而已、川上鏗太郎亦在、夕更ニ設新塾入費會議”(1881.5.21,308)と長善館の旧門人や地域の有力者が集合して頼母子講を開いた。その後塾新築の会合をもった。参加者には以前から塾新築に関わっていた者も多くみられ、多数が会合する菁莪会と合同にして、塾新築への幅広い意見を取り入れようとしたのであろう。

つづいて“宗家主人及和田片桐長谷川解良笹川来会、議新塾入費有志云々、内田小島欠席、金内諸子亦欠席、高島氏代理某来”(1881.5.29,308)とある29日の会合は、25日に“皆請新塾建築入費協議也”と呼びかけ、塾新築費用の話し合いのためだけに集合した。約10日間のうちに大規模な会合を2度も開催したのは、21日の会合で“宗家主人来異議”とあるように、費用の援助方法などで意見の一致に至らなかったからであろう。この会合の後、翌日に和田へ助力を頼んで以降は会合の記述はない。29日の会合でなんらかの結論が得られたのであろう。そして和田と“決開館会日七月十七日”(1881.6.13,308)した。7月に入り“草報開館式及祭典…三十通、議開館式献立”(1881.7.3,308)とあるように、式典の準備をして、多くの客人を招き7月17日に開業

式を挙行した⁴¹⁾。

以上の経過から、長善館に深い関わりをもった地域の有力者たちは、頼母子講などによる普段から強い交際関係の延長線上で、門人を入門させる程度の関係にとどまらず、塾の運営においても塾を支えていた。まさに塾は地域社会において支えられていた。

こうした関係は、1885年の塾規改正、1887(明治20)年の鹿之介死去に際しての塾継続の可否についてなど、他にもみられる。これら事例からは、近世以来の塾が明治になってもしばらくは、地域の期待を背負う教育の場でありつづけたことが示される。

おわりに

本稿からは、明治前期の社会における漢学塾をめぐる教育の構造の一端が明らかとなった。明治前期の農村部の漢学塾長善館は近代化する社会にありながら、幕藩時代以来の伝統的な地域の富裕層、知識人や名士の子弟で構成されていた。そして塾は、教育の場(結合)として地域社会から自律した位置にあった訳ではなかった。塾は、塾および門人がともに包含される地域社会にて長時間をかけ築かれてきた、血縁や政治、文化、宗教などの多様な社会的結合との密接な関わりで構成され、支えられていた。つまり、当時の地域社会における教育の構造は、塾外の社会的状況と密接に関係していたといえよう。しかし、伝統的な社会構造だけに還元しきれない、個人的意思の強い青少年の入門事例も見られたことは強調されよう。

そして周辺の同程度の場との比較からは、その構成は結成過程、運営形態、地理的条件や教育内容により

可変性があることが示され、制度に則る中学校との比較では漢学塾が必要性の面で、当時の地域で劣位に立っているわけではないことが示された。

なお本稿は、入門(=入口)の場面に注目した。したがって検討結果は塾が存在する地域との密接な関係が強調された。しかし塾に学んだ門人たちの中には都市への遊学や高等教育へ進学した者もいたようだ。近代社会に進路を取った彼らにとって、漢学塾の学習はどのような意味をもったのか。一方で地域に戻った門人もどのように学習を位置づけたのか。今後はこの結果に基づいて、教育実態(=過程)とその結果(=出口)をみることで、漢学塾、ひいては学問塾の歴史的意味をより深く検討していくことが課題となる。

(指導教員 土方苑子教授)

註

- 1) 神辺靖光『日本における中学校形成史の研究〔明治初期編〕』多賀出版、1993。同『明治一〇年代の東京府の漢学塾—「明治一六年・東京府管内私立諸学校表」を中心に』幕末維新期漢学塾研究会・生馬寛信編『幕末維新期漢学塾の研究』溪水社、2003。小久保明浩『塾の水脈』武蔵野美術大学出版局、2004。
- 2) 色川大吉『新編 明治精神史』中央公論社、1973。久木幸男『自由民権運動と儒学教育—小笠原東陽の場合』『仏教大学報』40、1990など。学問塾研究全体でもこのような傾向は変わらない。
- 3) 木村政伸『近世地域教育史の研究』思文閣出版、2005。
- 4) 福田アジオ編『結集・結社の日本史』(『結社の社会史』1)山川出版社、2006。社会的結合については、二宮宏之編『結び合うかたち—ソシアビリテ論の射程』山川出版社、1995も参照のこと。
- 5) 沿革については、鈴木虎雄前掲書。「長善館学塾概略」『長善館学塾史料(上)』新潟県教育委員会、1974。長善館史蹟保存会『長善館余話』1987。
- 6) 新潟県郷土叢書編集委員会編『新潟県郷土叢書』1、歴史図書社、1976、pp.24-31。
- 7) 各年度『新潟県学事年報』新潟県立図書館蔵。
- 8) 神辺前掲書、pp.860-864。
- 9) 「教場時間揭示ノ文 明治十一年二月一日」前掲『私塾長善館沿革略』、p.12。
- 10) 「明治十二年回答乙第一号 四月十四日」『長善館学塾史料(上)』p.254。
- 11) 史料番号394『長善館日誌』1886.2.1。
- 12) 高木靖文『明治前期私塾考—鈴木氏長善館の伝統と苦悩』『燕市史研究飛燕』7、1989。『吉田町史 通史編(下)』吉田町教育委員会、2003、p.101。
- 13) 『誠意塾及門録』長岡市立図書館蔵。誠意塾については『長岡教育史料』(北越新報社、1916)pp.313-364。
- 14) 「明治十五年九月 西蒲原中学校生徒名簿」『明治十六年九月 西蒲原中学校生徒名簿』『朝妻家文書』690、新潟市役所蔵。重複を除くと72人の生徒の在籍が確認される。
- 15) 前掲『吉田町史 通史編(下)』pp.145-149。
- 16) 中山清『千町歩地主の研究(IV)』京都女子大学、2003、p.12。
- 17) 『明治廿六年新潟県統計書』新潟県庁、1895、p.53。
- 18) 『吉田町史 通史編(上)』p.512。
- 19) 前掲『明治廿六年新潟県統計書』p.53。
- 20) 前掲高木論文。
- 21) 前掲『誠意塾及門録』。
- 22) 同前。
- 23) 前掲高木論文。
- 24) 前掲『新潟県学事年報』。
- 25) 前掲の生徒名簿には、氏名上部に“給”と記され給費生徒であることが示される。
- 26) 菊池城司『近代日本の教育機会と社会階層』東京大学出版会、2004など。
- 27) 郡内には他に県知事などの支援を受けた有志による私立明訓学校(1882年設立)もあり、中学校に準じた教育をしていた。
- 28) 前掲『結集・結社の日本史』p.12
- 29) 同前書、p.12、pp.345-346など。
- 30) 本稿対象時期では73例が見つかる。そのうち48例に付添人が確認できる。
- 31) 以下日記からの引用は(西暦.月.日.資料番号)で示す。
- 32) 『新潟新聞』1885.2.4。『吉田町史資料編』4、吉田町教育委員会、1999、pp.291-292に採録。
- 33) 『粟生津村役場文書』燕市吉田支所蔵。同前『吉田町史資料編』4、pp.90-98に採録。
- 34) 『吉田町史 通史編(上)』吉田町教育委員会、2003、pp.472-487。
- 35) 小川善吉『自立志文 戊寅十一月 即題』『長善館草稿二』『長善館学塾資料』412。
- 36) 『新潟県学事第四年報』。
- 37) 長善館再建開業式祝詞並序『長善館学塾史料(上)』p.151。
- 38) 同前書、p.151。
- 39) 「与兒鹿及姪椿書」同前書、p.151。
- 40) 「菁莪会講金証書」『長善館学塾資料』史料番号203には、菁莪会の帳簿の一部が1875(明治8)年から1894(明治27)年まで綴じられている。
- 41) 『新潟県史通史編近代一』p.389の長善館は寄付を受けずに運営したという記述は事実誤認である。

本稿の作成にあたり、新潟県立文書館、新潟県立図書館、新潟市役所歴史文化課、長岡市立中央図書館、吉田町立史料館に史料閲覧にあたりご配慮いただいた。記してここに感謝の意を表したい。また、史料調査にあたっては、東京大学より「学術研究活動等奨励事業(国内)」の助成を受けた。